子供はばかでなかった

小川未明

青空文庫

吉雄は、学校の成績がよかったなら、親たちは、どんなにしても、中学校へ入れてやろうと思っていましたが、それは、あきらめなければなりませんでした。

「なにも、学校へいったら、みんなが偉くなるというのでない。りっぱな商人には、小僧から成り上がるものが多いのだよ。家にいては、なんのためにもならぬから、いいとこをさがして、奉公なさい。そして、お友だちに、まけないようにしなければならぬ。」と、お母さんは、いいました。

いままで、小学校時代に、仲よく遊んだ友だちが、それぞれ上の学校へゆくのを見ると、うらやましく、お母さんには思われました。

「なぜ、うちの子は、もうすこし勉強をして、できてくれぬだろう?」

こう思う一方には、また、できない我が子が不憫になって、

「あの子の心のうちこそ、いっそう、悲しいだろう。」と、考えて、なにもいうことはできなかったのです。

町の、大きな呉服屋で、小僧が入り用だということを聞いたので、そこへ、吉雄をやることにしました。

「よく、ご主人のいいつけを守って、辛棒するのだよ。」と、お母さんは、いざゆくというときに、涙をふいて、いいきかせました。

子供が、いってから、二、三日というものは、お母さんは、仕事も手につきませんでした。

「いまごろは、どうしているだろう?」と、思ったのでした。

すると、五、六日めに、ひょっこり、吉雄はもどってきました。

「どうして、おまえ帰ってきたのだい。」と、驚いて、お母さんは、たずねました。

「上の小僧さんが、意地悪をしていられない。」と、吉雄は、訴えました。

「そんなことで、帰ってくるばかがあるか?」と、お父さんは、しかりましたが、お母さんは、そこばかりが、奉公口でないといって、ほかをさがすことにしました。

これも、町で、きれいな店を張っている時計屋でありました。そこで、もう一人、小僧がほしそうだから、世話をしましょうといってくれた人がありました。

「ほんとうに、時計屋なんかも、いい商売だね。」と、お母さんは、喜びました。

吉雄は、その人につれられて、時計屋へゆくことになりました。

「またつとまらんといって、帰ってくるようなことがあっては、近所に対して、みっともないから、たいていのことは、我慢をするのだよ。」と、お母さんはいいきかせました。

吉雄は、うなずいて、出ていきました。やはり、二、三日は、お母さんは、子供のことを案じて、仕事が手につきませんでした。

「つらくても、我慢をしているのでないかしらん? あんなことをいうのではなかった……。」と、思いわずらっていますと、

「僕、帰ってきた……。」と、入り口でした声は、たしかに、自分の子の声でありました。母親は、またかと驚いて、飛び出しました。

「どうしたんだ? 吉雄……。」と、お母さんは、思わず、我が子の顔をにらみました。

よくきくと、時計屋のおばあさんは、病気で臥ているのでした。吉雄は、その看病のてつだいをさせられるのがいやさに、出てき

たというのであります。

「もう、お年よりで臥ていられるのだから、そんなこと、なんでもないじゃないか。」と、お母さんは、ひたすら、吉雄が、勤めのいやさから出てきたと信じて、しかりました。

「僕は、たんつぼのそうじなんか、させられるのはいやだ！」と、吉雄が、いいますと、お父さんは、これを聞いて、

「子供に、そんなことをさせるのは、先方がよくない。いやがるのは、もっともだ。」と、こんどは、お父さんが、吉雄に味方されたのでした。

吉雄は、家に帰ると、いつも川のほとりにゆきました。川は、村はずれの丘のふもとを流れていました。草の上に足を投げ出して、あちらの空をながめるのが大好きでした。彼はかつて、ここの景色を絵に描いて、学校で先生にほめられ、その絵は、張り出しになりました。また、ここを文章で書いて、甲をもらいました。

その日も、ここへやってくると、川の水はゆるく流れて、空をゆく、白い雲の影を、ゆったりとした水面にうつしていました。

「釣りにくれば、よかったな。」と、思っていますと、丘の上で、ちょうど自分ぐらいの少年がくわをふり上げて、土を耕し、なにか植えていました。

「僕も、町へなんかゆかずに、ああして働いたら、どんなにいいだろう……。」と、思っていると、その少年がうらやまれたのであります。彼は、少年のそばへゆきました。そして、二人は、じきに仲好しになってしまいました。

その少年は、りんごの木を植えていたのです。体が弱いので小学校を卒えると、自分は果樹園を営むことにしたのです。それで、自分一人ではさびしいから、

「君もお父さんや、お母さんが許されたら、ここへこないか。二人でいろいろなものを栽培して、愉快に生活しようよ。」と、少年はいったのでした。

「僕は、きっと許してもらうよ。」

吉雄は少年と誓いました。そして家に帰って、熱心に頼んで、許してもらったのです。

いま、この村で二人の少年が、経営している果樹園を知らぬものはありません。春のうららかな日に、ここを訪ねると、川べりには、紫の星のようなヒヤシンスが、一面にいい香りを放っています。また、真っ赤なチューリップが、金色に日の光にかがやいています。

そのほか、いちごの畑があり、夏にかけて、丘のスロープには、大粒なぶどうのふさが、みごとに実るのでした。

二人の少年園芸家の、うわさが世間に広まるたびに、吉雄のお母さんは、喜んで鼻を高くしたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　8」講談社
　　1977（昭和52）年6月10日第1刷発行
　　1982（昭和57）年9月10日第6刷発行
底本の親本：「青空の下の原っぱ」六文館
　　1932（昭和7）年3月
初出：「国民新聞」
　　1931（昭和6）年3月1日
※表題は底本では、「子供《こども》はばかでなかった」となっています。
※初出時の表題は「子供は馬鹿でなかつた」です。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：津村田悟
2020年3月28日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（https://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

子供はばかでなかった

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/